
私の隣の廃人さん

結城 稟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の隣の廃人さん

【Nコード】

N6028M

【作者名】

結城 稟

【あらすじ】

学校で話題のオンラインゲーム「エレメンタルオンライン」専用のヘッドギアを着用して見る世界はまるでもう一つの”現実”のようだった。

そんな非現実世界にのめり込んだ人達を廃人と呼ぶ。

——自分には関係のない世界。

そんな風に思っていた瑠衣が、ひょんなことから、
「エレメンタルオンライン」をプレイすることになって・・・

現実 + 非現実 || オンラインゲーム!!
ゲームは一日二時間までです!

(1) 日常(前書き)

この小説の題材はオンラインゲームでございます。

基本的に何も考えずスラリと読めるように頑張っていると思っています。

恋愛あり、友情あり、冒険あり、ファンタジーありー!!!

ただし一部暴力的、流血及び過激な表現があります。

しかも全てはフィクションです。

ちなみにフィクションって嘘って訳じゃなくて、真実ではないって事です。

オンラインゲームもまさにフィクションですね。

気ままに読んでください！

(1) 日常

——つまらない世界は、いつだって何も変わらないから、それを変えようともがくと、——心が「嫌だ」と軋んだ。

「首尾よく整っているのかい？」

あたかも物々しい薄暗い部屋の中、ろうそくの火の明かりだけを頼りに光が存在していた。

その一番奥、中でも明かりが届きそうもない場所から、透き通る様なややトーンの高い少年の声が聞こえる。

「はい。フェンリル様の思惑通り、PKプレイヤーキルをするものが多数見かけられたとの報告が入ってきております」

少年の前には、赤いマントと白いフルアーマーに身を包んだ騎士が少年に敬々しく頭を下げていた。

その言動にフェンリルと呼ばれた少年はニツコリとまるで、屈託の無い笑顔を見せる。

「そうかい。フィンブルヴェトまで、もう少しだね」

「はい」

「時に、ハティ。スコルは大丈夫なのかな？」

”スコル”という言葉に一瞬ハティと呼ばれた騎士は、身体を少しだけ震わせた。

そこから更に十数秒の沈黙。やがて、

「……はい」

と決意したかのような声で答えた。

「ふふふ。そうかい。それならば始めるとしようか」

フェンリルの小さい可愛らしい笑い声が薄暗い部屋の中に響いていた。

——手にしてないものを追い求めるより、手にしたものを維持するほうがよっぽど難しいよ。

「ねえねえ、瑠衣ー？ まだ一緒にやる気にならないの？」

「ふえ？何を？」

瑠衣と呼ばれた少女がクリームパンを食べながら、正面の少女と対話をする。

「いやだからさ、」

声をかけた和子わこは呆れ顔である。

セーラー服の制服のリボンの両端をクリクリと弄びながら考える。今この少女の頭の中で思考されているものは、目の前の同じ高校に通う黒髪おさげの瑠衣という可愛らしい友人を如何にして、自分がゴリ押しをしている、『オンラインゲーム』に引きずり込むかである。

『瑠衣が一緒のゲームを始めて、一緒に遊びに行く』という野望は

尽きない。

それほど目の前の少女と一緒にいるのが、ほっとしたり、楽しい日々であり、それが家に帰ってからはずっと一緒に居たいという彼女の夢でもあるのだった。

「エレメンタルオンラインだよー。いつも言ってるじゃん！　うちの学校でも結構やってる人多いんだよ？」

「んあ？　ああ、和子のはまってるゲームか……モグモグ」

「んあ？　ってなによー！　モグモグすんなー！」

瑠衣はいつもと同じ返答をする。

彼女はまるで興味がないうちに自分をあしらっている。

そんな状態は和子にとって、自分がゲームを始めてから幾度となく瑠衣にそのゲームを勧めた結果であり、それは今日も変わらないようだった。

「一真かずまもなんか言ってるよー！」

——こうなったら奥の手だ。

と、和子は机と一緒に並べていた、同じゲームをしている一真という少年に助けを求めた。

「そうだねえ。瑠衣ちゃんも一緒にやろうず！　楽しいよっよー！」

「いや、二人のラブラブを邪魔しちゃ悪いから」

「——一理ある！」

「ないわよ！　バカズマ！」

ちよっと赤面した和子がツツコミをいれた。

和子と一真と瑠衣の三人の関係は、幼馴染みである。

幼稚園の頃から一緒、小学校でも中学校でも、もちろん今の高校でもいつも一緒だった。

更に深く語るとすると、和子と一真の二人の関係は恋人という位置づけになる。

二人が幼馴染みというカテゴリからの脱却を果たしたのは、去年の中学校最後の夏休みの花火大会の時。

ちなみに、立役者は瑠衣であり、二人はお互い好きあっていたのだが、どうにも臆病になってしまい一步を踏み出せなかったのだが、

「いやもう分かってるから！ イライラする！ 付き合え！ もう接吻して?!」

結果、瑠衣が二人の「大好きなんだけど、一線を越えられない！」という傍から見てかなりイライラするシチュエーションを、いつも冷静な態度から豹変してその言葉を残して走り去った。

その二日後に和子から届いたメールで「付き合うことになりました、ありがとう」と報告受けた瑠衣は、

「やっとか……。イライラした」

と愚痴をこぼしたのを二人は知らないほうがいいだろう。

そんなこんながあり、二人のラブラブっぷりは更に上乘せされたのだが、瑠衣にとって、もう昔からずっと見続けていた事なので、気にする風もない。

昔から、遊びに誘ったり、はしゃいだりする役割は和子と一真の役だったし、その二人をまるで母親の様に、一番近い位置で見守り続けるのが瑠衣の役だった。

それは高校に入学した今でも同じだったし、変わらない。

和子と一真と瑠衣を外部の友人達が口を揃えて瑠衣にかける言葉といたら、

「大変だね、一姫二太郎も辛いね」とまるで瑠衣が母親の様な扱いだった事も二人には伏せておくべきだと思われる。

「ねえやろうよー？ あともう少しで楽しいイベントもあるんだよ？」

「へえ。楽しそうだね。ご馳走様でした」

やっぱり興味のない瑠衣がクリームパンを食べ終わった。

誘うのに夢中で和子が自分で作ったお弁当は自分の分は全く進んでいない。

それを外から同じく和子に手作りで作って貰った弁当を食べ終えた一真の箸の魔の手が伸びていた。

「もう！ 一真もお弁当ばかり食べてないで、誘ってよー！」

「えー。だって、和子の弁当、まじでうまいんだものー」

「……バカズマ」

返答の言葉は悪かったが、やはり赤面した和子は一真に自分の分のお弁当を「半分だけだよ？」と差し出した。

「やべー！ 愛してるよ和子ー！」と一真が弁当に食らいつき、それを口の端を緩ましながら見つめていた瑠衣に気付き更に濃く赤面することになる。

「あーあ。一緒に遊びたいなあ」

「うちにパソコンは一台しかないからね。お父さんが使っているやつだし無理だよ」

「うめーマジうめえーこれは勝つる！」

「じゃほら、お父さんが使い終わったあとに貸して貰えばいいんじゃない？ ほら、溜衣ってハマリ癖あるし、多分私達よりも、のめり込むんじゃないかな？」

「いやよー、ウィルス感染とかしたらメンド臭いしね。ハマリ癖があるって事是否定しないけれどね」

「そのハマリ癖で、廃人になっちゃわないように私がしっかり面倒見てあげるからね！ リアルでは勝てないし」

「ふふふ。勝てないなんて事ないと思うけれど、まあ和子みたいに、学校を時々休んじゃうくらいはノメリ込まない様にしたいわね」

「モグモグ……ぐ……ぐふー！ なん……だと、これが……真のハンバーグだと？！ なんてこった、びっくりドンキーもびっくりだぜ！」

「……一真、本当にうるさい」

瑠衣はそれを見てまた微笑ましく笑っていた。

実は無視を決め込むつもりでいる瑠衣は、一真と和子のはまっているエレメンタルオンラインに対して興味がない訳ではない。

以前から誘われているエレメンタルオンラインなるゲームを調べていた事もあるのだ。

本来ゲームなど一切したことのない瑠衣にとって、「ゲームのことを調べる」などという行為自体がかなりのレア感漂うことなのだが、やはりというべきか、それは全て瑠衣には色々難し過ぎるのだ。

調べたあげくに、このゲームは自分に向いていないゲームだと確信したのも事実である。

色々カスタマイズの出来る顔、種類の分けられた髪型、幾重にもあるステータス、更に奥深く追求されている職業、スキルに至るまで、全て読み終えた後の疲労感は半端なかった。

勉強はそこそこやれる、運動だってそこら辺の女子には負けない体力だってある（しかし和子には負けるのだが）、自分のハマリ癖も理解をしている。

だからこそこの手の追求出来るゲームというのを遠ざける傾向にあるとも言える。

まだ高校一年生になったばかりである、出来ればこのまま大学にも進学をしたいと考えている瑠衣にとって、今は出来ればそれなりに勉強などに専念していきたい。

よほど難しい大学を志望するわけではない限り、このままのペースで行けば入学も夢ではないはずだが、ゲームにハマリ過ぎて、それらが無駄にしたくもないと考えてしまうのだ。

「まあ、考えておくよ」

それが瑠衣に取って、和子に出来る限りの精一杯の誠意である。きっと和子だって気付いているはずだと思うけれど、もしかしたら気付いていないかも知れない。

「うん、そうして？ 待ってるからね！」

「待ってるよ！」

「うん……。きっと待ってるからね！」

和子と一真がこれ以上ないくらいに素敵な笑顔を見せ付けた。

瑠衣には、なんだか罪悪感を覚えるほどの爽やかな笑顔だった。

しかし一瞬の事であったが、和子が切なげな顔をしたのを瑠衣は見取れる事が出来ただろうか？

多分気付く事はなかっただろう。

この時三人は、オンラインゲームで三人で遊ぶ事は叶わないだろう。と三者三様に違う発想で考えていた。

(2) 違和感

——みんな、自分が思うよりも、自分が欲が深い人間だって気付かないよね？　なんでだろうね？　欲なんてないと人間がダメになるっていうのに

「フェンリル様、一部の人間ですが、」

また薄暗い部屋の中に二人の影があった。

一体ここはどこで、どんな場所かも検討が付かないくらい薄暗い、家具もなく部屋としての機能など全く有していない場所。

今回も赤いマントを羽織った白いフルアーマーの騎士ハティと姿の见えないフェンリルであった。

「一部の人間が、私たちの動きに気付いたように思われる行動を起こしています」

「へえ。そうなんだ？　ちなみに情報は揃っているのかい？」

「はい」

「教えてくれるかな？」

ハティは今現在進行させている作戦「フィンブルヴェト」の障害となりうる人物の名前を次々とあげていき、

更には分かる人物にしては名前以外の情報も全てをフェンリルに教えていく。

「ふむ。で？　首謀者は？」

「オーディンだと思われます」

「ああ、あの有名なギルド『神の騎士達の集い』の聖騎士か」

ワーカーホリック

「はい」

「止められるのかい？」

そう聞かれて、数秒考えた後、ハティは無表情のままに、しかし確固たる意識のもと迷う事なく答えた。

「むしろ我々を止める事など出来ないと思いますが？」

疑いなどまるで無い様な明らかな発言ににんまりとした表情でもって、フェンリルは立ち上がった。

「そうかい、それなら心配はないけれど。釘をさす必要はあるよね？ スコルにお願いしようか」

「かしこまりました」

「何も知らないというのは、何も心配なくていいよね」

——日常は大した事のない毎日ですが、突然崩れ去るなんていうことはよくあるものですね。

「おい溜衣」

朝のホームルームが終わり、一限目の化学の授業を受ける為に溜衣が化学室に向う準備をしていた所に、

歴史の教師で担任でもある堀田が難しい顔をして腕を組んで溜衣を呼び止めた。

「はい？ どうしたんですか？」

「いやそれがな……」

なにやら言い出しにくそうな表情の担任を瑠衣は怪訝そうに見つめている。

しかし、早く言い出してくれないと次の授業に遅れてしまう可能性もある。

担任の責任で一限目を遅れる訳にもいかず、瑠衣は担任を促す事にした。

「早くしないと私、遅れちゃうんですけれど……」

「ああ……うん、そうだな。最近さ、和子と一真^{かずま}が、学校をよく休む様になったと思わないか？」

「あー……」

義務教育から外れたおかげでサボリというものを覚えた生徒が何人か無断で学校を休むなんていうことは日常茶飯事なのだが、

和子と一真は中でも群を抜いて最近休みがちなのであった。

なんとなく瑠衣は事情というものに身に覚えがある。

オンラインゲームでもしているのではないかと思うが、そこに関してはこれもまた”日常茶飯事”だったりする。

和子はゲームがかなり好きなのだ。そのおかげで、中学時代から稀に学校を休む事はあった。

瑠衣にとっては当たり前なのだが、学校のしかも新一年生の担任としてはそんな事情を知るわけもなく、――まあ知っていたとしても許せるものではないが。

やはり事情は知りたいのだろうか。

瑠衣は、本当のことを話していいものか考えた後。

「そうですかね？ あの子は、昔から病弱だったりするので、ちょっと体調を崩しているんじゃないですか？」

これは本当の事である。

和子がゲームに熱中するようになったのは、体調が悪くなりやすい体質の為に、学校にはいけなくとも家ではヒマという状態を抜け出す為の手段としてやっていた

ゲームがきつかけだったりする。

今でもたまに本当に体調を崩してしまい、土日の学校のない日に遊びに行くという約束もキャンセルになるなんていうことはあったりするのだ。

「そうなのかあ。まあそれなら……よくはないんだけどね？ いやさ最近、引きこもりとかそういうの多くてイジメが原因とか——」

生徒を大切に思う事は大事なのだが、考え過ぎな教師も大変だなと少し憐れみつつ、

「そんな話は聞いた事ないので心配しなくても大丈夫だと思います。良かったら帰りに寄ってみますよ」

それを聞いた担任は、少しほっとしたような表情になり、「お願いする」と言って溜衣を開放した。

——確かに最近ちょっと休みすぎだね。バシッと言ってやるか。一限目の教室移動中のさなか溜衣はそんな風にある意味簡単に考えていた。

ピンポン……
ピンポン……
ピンポン……

その後、学校を終えるまで学校に顔を出す事のなかった和子にプリントなどを渡すべく、瑠衣は自分の家から徒歩五分程しか離れていない和子の家の前にいた。

そしてそこから既に10分は経過している。

——…どうしたんだろ？

いつもは学校を休んだ時は、瑠衣が和子と一真にプリントや提出物などを持ってくると言うのは瑠衣なりのお節介でやっていることで、それを二人は有り難く思っていたようだった。

なので体調が悪くても、ゲームをしていたとしても、家にいないという事はほぼなかった。

買い物に出掛けているのかも知れないとは思っているのだが、なぜか家に居るようなそんな気がしていた。

「携帯も繋がらないし……。携帯電話は携帯しないと意味がないとあんなに言ったのに……」

昔から遊びに行く時に色々なものを用意するのは、瑠衣の仕事であつた。

計画は和子と一真で、準備は瑠衣。それがパターン化されてしまっているのに、たまに和子は日常生活において、とんでもない忘れ物をするがよくある。

中でも携帯電話は忘れることが多い。

——ゲーム機は持ってくる癖に……。

独り言ちて、瑠衣は和子の家を後にして、一真の家に行くことにしたのだが。

「あらあー……瑠衣ちゃん？ 久しぶりね？」

一真の家を訪れた瑠衣を迎えたのは、なぜかワイシャツだけ羽織った一真の母であつた。

おっとりとした優しい性格の美人さんでスタイル抜群でお淑やかな性格の持ち主なのに、なぜかいつも薄着だったり、下着姿だったり、メイド服だったり、露出の多い服装を好んで着用している。

依然に瑠衣が「どうしてそんな服を……？」と聞いた所。「夫の趣味なの」と彼女はまるでご主人様を敬愛するメイドの様な笑顔で答えたという。

「どんな趣味だよ！」とツツコミを入れることさえ叶わない笑顔に瑠衣は、あっさりと理解したものだった。

「こんばんわ。一真君はいらっしゃいますか？」

なので今回の服装にもツツコミ一つ入れずに瑠衣は、聞きたい事だけ聞いた。

「あらあら、瑠衣ちゃんはずいいに私に対するツツコミを放棄しちゃったのかしらねえ。ずいぶんと大人になったものね」

「いえ、あきらめただけです。一真君いますか？」

「あきらめるといふのは大人がすることなのよ？　まだ十代の瑠衣ちゃんが、諦めるなんて言っちゃだめよ？」

「すいませんでした。以後あきらめるといふ言葉を忘れることにします。一真君いますか？」

「私、素直な瑠衣ちゃんが大好き♪　素直さって大事よね？　一真も素直になって欲しいわ」

「一真君は、お母様に似てある意味とても素直に育ってますよ。一真くんいませんか……？」

「そうかしら？　でもなぜか反抗期とかそんなものもなかった気がするから、きっと私が知らない所で素直な一面を見せているのね」

一真が人の話を聞かないのはよくある事だけれど、それはきっと母親譲りだろう。

そろそろ疲れてきた瑠衣が、「一真君いなければ右手を、いれ
ば左手をあげてください」とジェスチャーに頼る事にした結果、右
手を高くあげていた。

一真はどうやらいないようだった。

「分かりました……。とりあえずプリントだけ置いていきます」
「ありがとう♪ 瑠衣ちゃんまたきてねー！」

ワイシャツ姿の一真の母親の元気な笑顔で瑠衣は見送られたのだ
った。

——おかしいな。

そんな思いを瑠衣は拭い切れない。

もしかしたら二人でどこかに出掛けているのかも知れないという
気持ちも確かにあったのだが、それでも学校を休んでまで行く場所
があるのだろうか？

そんな事は土日になればいい、それは二人がいくらラブラブだか
らと言っても許せる事ではないし、そもそもその可能性の低さと言
ったらなかった。

二人は瑠衣が思ってる以上に健全な付き合いをしていて、今まで
も学校を休んで遊びに行くことなどなかった。

それよりも和子が風邪で休んで看病をしていて一真も休んでいる。
そちらのほうが多かった。

もしかしたらと思い、瑠衣はもう一度和子の家に戻ってはみたが、
やはり誰かが迎える事はなかった。

(3) 出発準備

——暗い部屋で引きこもる事を良いとしない人間は山ほどいるね、よく考えて欲しいんだけど、みんな寝る時は電気を消すでしょ？それと何も変わらないよ？

次の日も、またその次の日も和子と一真が学校に来る事はなかった。

急な出来事で瑠衣は焦っていた、あれからやはり毎日足しげく和子と一真の家に通っているが、一度も本人と出会う事は出来なかった。

前は良いタイミングだったのだろうか、一真のあのキューティクルな母親とも再会することも出来ずに瑠衣は、正直困り果てていた。

多分携帯の履歴は、瑠衣からの着信で目一杯になっている事だろう。さすがに何日も携帯に出なかった事はない。

自宅の固定回線に電話して両親に事情を説明し本人を出して貰う事は容易い事はあるのだが、それはなんだ瑠衣には気が引けた。娘、息子が何日も学校を休んでいるなど、両親は知っているのだろうか？知っていたとすれば和子も一真もここまで学校を休む事はないだろう。

瑠衣が自宅に電話を入れる事で、二人の両親に心配をかけてしまう。それは本当に幼馴染、親友であってもお節介過ぎるのではないか。

しかしこのままでもいいのだろうか？いつかバレてしまうはずだ。そうになったら和子と一真はどうなってしまうのだろうか？

そういった考えが瑠衣の頭の中を消えては現れてを繰り返していた。自分はなんて非力な人間なのだろうか。

今まで、こんなにも長い時間二人に合わなかった事はなかったと

思う。不安は心配を募らせていく。

「瑠衣、あいつらどうしたんだ？　というより、うちの学校でまた何人かの生徒が一昨日から休んでいるらしいんだ……。何かしらないか？」

担任の堀田は生徒思いで有名だ。

「何でもいいから気付いた事があったら教えてくれ」
「はい……」

実際、瑠衣はそう言うしかなかった。

夜になって瑠衣は自室で思考する。今休んでいる生徒は、和子と一真を含めて、かなりの人数がいるようであった。

それは学年問わずいるようで、調べてみたところ、趣味もバラバラ、特徴が同じなんて事もなく事件性はないようだが。

一部当てはまるものがあるとすれば、”最近オンラインゲームにはまっていた事”。それは休んでいる各生徒の友人から聞き出したものだった。

和子と連絡が付かない、一真も電話に出ない。どうすることも出来ない。

しかし、鍵はぶら下がっている。「オンラインゲーム」その言葉が瑠衣の頭から離れない。

もしかしたらゲームの中でなら会えるかも知れない。

——でも……一体どうやって探せばいいんだろう……。オンラインゲーム。

ゲームと言えど、ログイン数は約1000人弱からなる。それは1000人以上の人間がこのゲームで遊んでいるということ。1000人の中から、どうやって探すというのだろうか？

しかも見た目は当てにならない。どうすればいいと言うのか、キ

ヤラネームさえも分からない。

どんな職業かも分からない。一体どうすれば……。そもそも本当にオンラインゲームをしているのだろうか？

いや本当は実際、何かの事件に巻き込まれているのではないだろうか？ いやでもその可能性は薄い。保護者が警察などに連絡をいれた情報は入ってこない。

家にはいるはずなのだ。なれば、ならばオンラインゲームか。

「やってみるしかない！ 何もしないよりはまし！ もし逢えたら……。うふふふ」

難しい事をずっと、そもそも学校から帰ってきて深夜まで。ずっと考えていた。

それくらい大切な幼なじみの二人だ。そして明日から土曜日だ。この休みのうちになんとか……！

——こんなに心配かけて……。そうか分かった、やってやる必ず探し出して一言言ってやる！！！！！！

ちよつと考え過ぎて壊れた瑠衣がお節介衝動を爆発させながらまず取った行動。それはパソコンの入手だった。

「パパ、パソコン作って！」

「よし待ってろ、速攻で組み立ててやるからな！」

何も聞かないで父親はいそいそと階下へ掛けて行った。

はつきり言って瑠衣と父親は非常に仲が良い。たまに休みの日は二人きりで買い物に出かける程だ。

瑠衣に母親はいない、瑠衣を産んだあとに重い病気に掛かってしまいいなくなった。

それからはずっと父と娘の二人きりで暮らしてきた。例えば、瑠衣が何か落ち込んでいる風な素振りを見せれば、いつもは瑠衣が料

理を作るのだが、瑠衣を元氣付けようと慣れない手つきで傷を作りながら手料理を振る舞ったり（味の問題は別として）、楽しい話で元氣付けようとするし、何か嬉しい事があれば娘以上に涙を流して喜んでくれたりと、悲しい事も楽しい事も家族二人で分け合ってきた。

父は娘を溺愛し、娘も父を溺愛していた。瑠衣のお節介や世話好きは父親譲りなのかも知れない。

ただし父親は瑠衣と違ってあまり深く考えこまない前向きな性格の人である。父の友人もそんな前向きな性格を頼って悩みを相談したりするようだった。

父の仕事は町の電気屋さんで自宅兼仕事場。一階がお店で奥と二階が自宅になる。

繁盛はしていない。だが、父の人柄の良さで、知り合いは大抵ここで家電製品などを買ってくれる。

父と娘、二人が暮らすには十分な利益はあった。

そんな父の趣味はパソコンである。自作パソコンは当たり前、修理からシステムチューニングもこなす。

町の電気屋にはあまり置かれていであろう、パソコンパーツが所狭しと棚を設けて置かれている。

なので、

「任せておけよ！ よしそうだな、まずはマザーボードだな。やはりここは王道のIntel製だろう。そして、CPU！ ここは押さえ気味にCore i5くらいに抑えておこう！

基本的にi7なんて使う必要ないからな！ それでもってビデオカードだが、どんな用途でもそれなりに使えるであろうGeForce GTX 470くらいにいらておこうか！ 極めつけはHDDとメモリだが、

これに関してはもうSSDとか使わずにS-ATAの320Gで十分！ メモリはDDR3の4G入れちゃうぞ！ OSは7だな！

キーボードとマウスはもちろんlogitec製だ！ あははは
ははは！ 最強だ！

30分で作ってやんよ！！！！」

階下から聞こえてきた声はちよつと壊れ気味だった。

果たしてそれがどれくらいの性能のマシンになるのか瑠衣には検討も付かなかったけれど、とりあえず父の愛をしっかりと受け取っておくとする。

かくして出来上がったマシンを瑠衣の部屋に設置まで終えた父は

「これでお前も立派なパソコン使いだ！ お前の望むように使うんだぞ！ ウィルスが入ってきたらお父さんに相談しなさい！ 30秒で消してやる！」

そう言い残して部屋を出て行った。まるで嵐のようであった。

そんな父にありがとうと伝えて瑠衣はマシンを起動する。ブウォーとファンの音がするかと思いきや全然しなかった。

おかしいなと思った瑠衣がマシンの本体を確認しようと思ったが、水冷式だからね！ と父が言っていた事を思い出した、かすかにHDDのチリチリとする音が鳴るだけで本当に静音に特化していた。

恐ろしい父親である。いや愛しい父親であった。

そうしてマシンが立ち上がりが終わわり、瑠衣がしたことはメールの習得、ゲームのクライアントのダウンロード、アカウント作成、そして攻略サイトの読み直し。

全てが終わるのにそれから一時間経ってからだった。

「よし始めよう」

瑠衣がゲームを起動しようとした瞬間。「デン！」という音と共に「エラーex1」という表記が飛び出した。

瑠衣がもう一度サイトを舐めるように見回したあと、ある事に気付く。

このゲームは専用のマイクヘッドセットギアを付けていないとダメらしい。まるでヘルメットみたいなそれが画面上に出てきていた。値段は高くはないのだが……。

「いやまさか、これは置いてないよね……。うちにも」

半ば諦めかけていた瑠衣が父に事情を説明したところ。

「え？ エレメンタルオンラインやるの？ ex1ヘッドギアでしょ？ 全然あるよ？」

「あるんだ？！」

「はははは！ ないわけないだろう！ 最近人気なんだよ？ 和子ちゃんと一真君も買って行ってくれたから瑠衣がいつか始めるんじゃないかって在庫をいつも一個取り置いてるよ！」

なんとという父親だろうか。まるで一瞬父が神の様に見えてしまう。

「パパ……大好きいー！」

「あーはっはっはっはっは！ 来月のお小遣いから引いてやろう！」

「パパ……」

前言撤回、父親はちゃんと父親であった。当たり前ことだったが。

(4) ヴァルキリー

——さあ！ 冒険を始めよう！ きつとんでもなく素敵な毎日になるように！

ex1ヘッドギアを装着するとまるで周りは闇のようだった。
その闇の中に白い文字と機械的な声が聞こえる。

ログイン音声を確認致します。マジックIDを教えてください。
——えっと、メールで来ていたやつだね？ 確か……
「き……来たれ真実を知る為に」

……………。音声を確認致します。再度マジックIDを教えてください。
さい。

——あれ？ 言い間違えたかも。

「来たれ真実を知る為に」

確認中……。Now Loading

確認致しました。キャラクターネームを教えてください。

——き、決めてなかった……。どうしよう。えっと、自分の名前
だけだと恥ずかしいから……。ちよっと付け加えてつと。

「ルイズ」

確認します。名前は一度決めると変更することができません。ル
イズでよろしいでしょうか？

宜しければ、「はい」を。変更される場合は「いいえ」をお聞か
せください。

「はい」

確認致します。確認中……。Now Loading

確認しました。あなたのキャラクターネームは「ルイズ」になります。

それではまずはあなたのお好みに顔や身長などを設定してください。

——身長は、普通に設定して……。顔……。どうしよう。ちょ、ちょっと可愛くてでもいいよね？

こちらでよろしいでしょうか？ ちなみに画面に映し出されたアニメ的な顔は、苦勞して作った感がそこかしこから溢れ出ている。宜しければ、「はい」を。変更される場合は「いいえ」をお聞かせください。

——30分くらいかかってしまった……。

「はい」

頭の中にウィーンという音が響き、真っ黒な画面から一転して美しく広がる空の中を映し出した。

まるで、大空の中を飛んでいるような錯覚さえ覚えるその風景に心を奪われていたが、気づいてみれば両手はしっかりとコントローラーを握り締める現実感もまたはつきりとしていた。

ようこそエレメンタルオンラインの世界へ！ あなたを全てのプレイヤーが歓迎します。

システムに付いて私、ヴァルキュリーがご案内します！

ようやく設定を終えた”ルイズ”の目の前には、青いフルアーマーで天使の白い羽を生やした幼く大人らしくも見えるヴァルキュリーと名乗った美少女が目前に広がる美しい空にも負けない凛とした雰囲気の手まいで待ち構えていた。

「こんにちわルイズさん！ 私の声が聞こえて姿が見える場合は何か返事をしてね？ もし見えない、聞こえない場合は、無言を続けてね？」

ヴァルクユリーがニコニコしながらルイズに問いかけた。

あまりにも声と天使の様な姿に目を奪われていたルイズは慌てて、「見えます！ 聞こえます！」と返事をした。

「うふふふ。可愛い人。ありがとう！ まずはエレメンタルオンラインの世界にようこそ！ これからあなたを少しサポートさせていただきます。ヴァルクユリーと言います。」

この世界は初めてかしら？ チュートリアルを全部聞きますか？」

「……はい、教えてください」

「……。分かりました！ それではあなたをエレメンタルオンラインの世界へご案内します。この世界の歴史は語りません。」

あなたの選んだ道。それが歴史になります。ここの歴史を聞くのは既にプレイを始めているプレイヤーのみんなに聞いてみてね？ 私よりもすごく詳しいんだから。

プレイヤー達が築いてきた歴史こそが、エレメンタルオンラインの歴史です」

もちろん既に録音されている音声のはずなのだが、もう生で聴いているとは思えない。

改めてこのオンラインゲームの人気の秘密を理解した。これは素晴らしいシステムだ。そう思わずにはいられなかった。

まずは基本音声チャットシステムの話、ウイスポー《囁きボイス》機能の話、続いてゲーム内の動き方、感情表現に値する、エモーションの発動方法。

そしてゲームの”ルール”。

「基本的にこのゲームですることといえ、決められたものはありません。

職業などある程度の道はあるけれど、プレイヤーのみんなは幅広く色々な事をしているわ。

基本職業をとことん突き止めて更に上の上位職になる人もいれば、Lv99の後に訪れる転生後に違う職を選ぶ特殊上位職になる人もいますし、

特殊上位職になれないけれど自分で好きな二つの職を極める二次特性職の方もいます。

もちろん一つの職を取っても、ステータスの上げ方でより个性的になっていくわ、

攻撃力・魔力・素早さ・器用さ・運・体力の順にSTR・INT・AGI・DEX・LUK・VITと表記されていきます。

何をどこまで上げるかは、ここは本当にもう人それぞれですね。

レベルや戦闘を極める人もいれば、鍛冶屋^{スミス}として自作武器を作成する人もいるの。

毎日材料を集めたり、依頼を出して集めてもらったりして良い性能を求めていくし、依頼人にあった性能の武器を追い求めることも出来るし、

何もしないでぼーっとしてる人だっているくらいよ？ ただし基本的な根本的な所はみんな同じよ。

モンスターを狩って、ドロップしたアイテムを売って生計を立てていくの。

募集を募ってモンスターの討伐依頼をこなしたりする時もあるわ。モンスターは、自動で群れをなしたりするからたまにプレイヤーからの依頼もあります。

そうして得た資金をこの世界で暮らす為に使っているのよ。

仲の良い男女は結婚システムで結婚されたりするし、みんなでギルドというチームを作って領土を争ったり、いつものパーティーメンバーで遊びに行ったり、

高レベルダンジョンでは、各所から色々な強者達が集まって、みんなで攻略に出掛けたりもします。

ちなみにダンジョンには通常のモンスターといわゆるそのダンジョンの主のMVPボスが存在します。

MVPボスを沢山倒す事によってMVPポイントを沢山貯めると……。ふふふその時のお楽しみにしててね。

なのであなたは自由にこの世界で暮らしてください。

あなたの暮らし方を笑う人もいるかも知れませんが、現実と同じように誰かに合わせて生きる。そんな無粋な事はしないでください。

あなたはあなただけの世界を築いてください。

ああ最後にもう一つだけありました！

私の名前がついたヴァルキューリスシステムというものがあります。プレイヤー同士やギルドで争ったり、モンスターに倒されたりすると、

プレイヤーはレベルが一つ下がります、更に装備されている武器や防具からランダムで一つアイテムがドロップされて他の人に取られてしまったり、消えてなくなったりする危険があります。

もうセーブポイントに自動で戻るしかありません。それがデスペナルティです。

それを回避するのがヴァルキューリスシステムです。

例えば死んだ時に同じダンジョン内に、ギルドメンバーやパーティーを組んでいる人が一緒にいれば、全滅しない限りデスペナルティは

受ける事はありません。

そして生き返る事が出来れば、レベルダウンもありません。

そうやってみんなと一緒に生きるといのがこの世界の醍醐味でもありますので♪

これで基本的なシステムのお話は終わりです。もっと詳しく知りたい場合はプレイヤーのみんなに聞いてね♪

これじゃなんか放任主義みたいですね」

うふふとヴァルクユリーは笑っていた。すごく美しい笑顔であった。

もちろん映像で音声なので、疲れた様子は一切感じられなかった。むしろ聞いていたルイズのほうに少し目を回した程に長い説明だった。

しかし、ヴァルクユリーの言った”生き方”はまさに無限にある。その一部をルイズに伝えたに過ぎなかった。

「さあ！ ルイズさん！ あなただけの素敵な世界をみんなと一緒に作って行ってね！」

「……え？」

「あなたの大切な友人をどうか、救ってあげてね」

一瞬何が起きたのか全くわからなかったが、ルイズはすぐに違和感に気付いた。おかしい。それは本当におかしな事であった。

ルイズの名前をこの音声プログラムは言ったのだ。まさかそこまで進化していたのかと一瞬驚いた隙について更にヴァルクユリーはルイズの目的である所の人探しも言い当てた。

そんな事があっていいのだろうか？ まるで心を読まれたようだった。まるで全てを知っているようだ。

「そんな……？ どうして？ あなたは」

「それでは、いってらっしゃい！」

「まって……」

それ以上、ルイズは言葉にすることが出来なかった。大空の風景が一転して暗闇に包まれて先程までの希望に満ちた青が一瞬にして黒色に染まり不安を抱かせる。

——さっきの人はだれ？ 一体だれなの？

その不安に煽られながらルイズは考えていた、先程の不思議現象の事を。まさか一体誰が？ この時のルイズには知る由もない事であった。

消えて行ってしまったルイズのいた空間を眺めながら、

「いってらっしゃい。私の可愛い子……」とヴァルキュリーはどこか淋しげな雰囲気を感じたまま振り返った。

その後ろにはいつの間にか現れていた、優しい笑顔をした男が立っている。

その男を捉えた瞬間、ヴァルキュリーの顔は緩んで、先程ルイズに見せていた笑顔とはまた別の特別な笑顔で男まで駆け寄り飛びついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6028m/>

私の隣の廃人さん

2010年10月9日03時57分発行